



TITLE:

追憶文 静田 均先生を偲びて

AUTHOR(S):

岡田, 賢一

CITATION:

岡田, 賢一. 追憶文 静田 均先生を偲びて. 経済論叢 1992, 149(4-5-6): 183-186

ISSUE DATE:

1992-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/44825>

RIGHT:

經濟論叢

第 149 卷 第 4・5・6 号

哀 辞

故 静田均名誉教授遺影および略歴

内発的发展と国民経済……………池 上 惇 1

国際的展望の中で見た日本のメーカーと

サプライヤーとの関係……………浅 沼 萬 里 18

地方財政調整制度をめぐる代表的論者間の

論争とその現代的意義……………李 昌 均 59

多属性効用分析における部分情報下の

スケール定数の決定……………朴 時 炫 82

総合商社の鉄鉱石商権と競争……………田 中 彰 107

住友金属工業の第2次合理化設備投資と

新しい生産体制の成立……………張 紹 喆 125

加工型畜産と飼料メーカーの展開……………村 上 良 一 145

GMの「戦略的再編計画」の展開過程……………平 野 健 160

追 憶 文

静田均先生を偲びて……………岡 田 賢 一 183

静田均先生の思い出……………高 橋 哲 雄 187

平成 4 年 4・5・6 月

京都大學經濟學會

追憶文

静田 均先生を偲びて

岡 田 賢 一

平成3年(1991)11月24日、静田 均先生は大往生を遂げられた。明治35年(1903)1月27日のお生まれであったから、享年は89年と10ヵ月ということになる。昭和55年(1980)1月7日に突然に倒れられて京大病院に入院加療。以後ご自宅で静養に努められた。数年後再び病に見舞われて重態を伝えられたが、持ち直されて入院生活をつづけられた。前後実に11年間に及ぶご闘病の生活であった。第一線からご退隠の先生にとって唯一の楽しみであった読書や会話をすら妨げた身体的な不自由さと世俗的な煩わしさから、もはや完全に超脱された意味において、またその長期間に亘るご遺族の、とりわけ先生と同居されていたご長男夫妻の看護のご苦勞を見聞きしてきた者の印象として、わたくしは先生の死を大往生と感得するのである。

ご法名 寿光院 京譽 均 照 居士 は、まさしく先生の真髓をよくあらわし得て妙というべきである。河上 肇に師事され、いまはその師の鎮まれる洛東の名刹法然院に永眠されている先生のご冥福を祈りつつ、かつて高橋教授の追憶文との重複を避けつつ、ここに先生の横顔を偲ぶことにしたい。

先生の厳父は日露戦争の停戦協定の成立した日、明治38年(1905)3月10日に戦死された軍人であり、戦前の小学校唱歌の『橘中佐』と陸軍士官学校が同期だったと聞いている。従って先生は厳父の顔を写真以外では知らないといわれていた。このために先生の養育は専ら母堂の手に託された模様である。ゆえに母堂に触れずに先生を語ることはできないであろう。昭和39年(1964)秋、92歳で亡くなられた母堂に対する先生の対応は、戦前の『修身』科の権化ともいうべきものであった。それは私どもから見ても文字通り「母を敬愛して已まず。」と受取れたし、先生のご生育歴を付度して、十分に領けるものでもあった。母堂には北白川のお宅に先生を訪ねた機会に数回お目にかかって、お話も伺った。小柄で随分のお年齢であった筈なのに、典型的な明治の気丈な賢夫人たる面影とともに、なぜかわたくしには懐かしさを覚える慈愛を備えておられたように思われた。「栄さんのことを思えば、均は勉強が足りませんよ。」とわたくしに話された

言葉がいまも耳に残っている。「米さん」とはわが国の民法学の権威我妻 栄東大教授のことである。我妻家と静田家とは同郷で両先生の母堂が昵懇の間柄と聴く。先生の学究への道はこの我妻 栄と、母堂の従兄で、内藤・桑原と京大東洋史学を背負った近世中国史の碩学矢野仁一の影響によるもののようであった。終始、母堂に仕えられた先生の生き態が、好悪を越えて私ども研究生に強烈なインパクトを与えたことは否めない。

研究者としての静田先生は、ご多分に洩れず謹厳正確で、記憶力の旺盛なことは当時若年の私ども院生を遙かに凌ぐものがあつた。夜はかなり早く就寝され、夜半の3時すぎから起きて研究に取り掛かれたようである。

先生は、マルクス経済学の理論研究を、特に学説史研究の視座から行うのが当初の目標であった。だが「現実には、自分の希望通りの講義科目が担当できるものではない。」といわれていたように、法政大学での「農業政策」、京城帝国大学での「経済政策」、そして京都帝国大学から旧制・新製の京都大学での「工業経済論」と、学説史研究とは懸け離れた経済政策分野の産業現状分析を主とする科目系列を担当されてきた。けれどもそのそれぞれの著述の行間に、厳密鋭利な学説史研究的な展開を随所に見受けることができるのは、先生の研究特性の然らしめるところであらうか。そして京都大学を停年ご退官の後、名古屋市立大学と名城大学に関係されたが、京都大学時代からの独占研究を契機として帝国主義論の体系的研究を企図され、名古屋時代も引き続いて学究活動を推し進められた。その時期には、すでに経済論叢その他に発表されたホブソン、カウツキー、ヒルファードینگ、レーニン、シュムペーター、ストレイチー等の帝国主義に関する所説の批判的分析に続いて、経済側面からのみの帝国主義分析のもの足りなさを克服すべく、政治的要素をも包摂した帝国主義論の構築を意図されていたようであった。敢えて断定を避けたのは、冒頭に触れたように、具体的な著述を発表されないまま病床に臥せられたからである。またその先生の研究意図をおこがましくもここに披歴するのは、伏見万帖敷町の先生のご自宅が小生の勤務先の研究室と比較的近接していたことから、書籍資料のご注文や清算の取次ぎを依頼され、そのことを介してお会いして所見を伺う機会が比較的に多かったからである。藉すに二三年をもってすれば「静田帝国主義論」ともいうべきものが期待できたであらう。いまも手もとに残っている昭和48年当時の先生の、あの独特の癖のある達筆で丹念に記された数十冊にのぼる書籍注文書を眺めながら、そしてまた静田研究室のOB研究会での講演、それは昭和52年7月27日に

京は出町の鴨川辺りにある御車会館で催されたのだが、その録音を再生しながら、一入の感慨を禁じ得ないのである。

指導教官としての先生の印象は次のようであった。われわれの研究は本人の自由に委ねられ、しかも必要な措置やアドバイスを適時に与えて、その成果には大きな関心を寄せられた指導ぶりは驚嘆に値するものであった。その事例として私事に亘って恐縮ではあるが、わたくし個人の場合を紹介してみたい。

昭和21年春、京都帝国大学の入学式は時計台のある本部の二階の大講堂でおこなわれた。入学生は、各学部長の前で宣誓簿に墨筆で署名した。顧みれば、その年の2月に経済学部再建の重責を担われた先生にとっては、学部長に就任された最初の入学式だったことになる。礼服に身を固められ端正秀麗な面差しにキラリと光る眼鏡ごしの深みのある瞳を意識しつつ署名したのが、わたくしと先生とのお出会いの始まりであった。そして昭和24年3月、学部卒業で帰郷し、内定していた滋賀県の某紡績会社に入社するために京都駅に向かう市電で先生と乗り合わせた。不況の年の卒業生の就職状況を気にされていたのか、先生から問い掛けられた。某紡績会社への内定を告げると、同社の労務管理の前近代性の実状を説明されて十分に注意するようにとの適切なご教導は印象深かった。果たせるかなわたくしは帰郷と同時に会社から一方的に採用取消の通知書を受取った。先生との私的な出会いはこのようであった。同社は、その後、人権騒動として社会的に注目を集めた労働問題を惹きおこして一躍有名になった。そして昭和25年春、これをご縁として私は先生の門を叩き、旧制の大学院に籍を置くことができたのである。

わたくしを選んだテーマに必要な海外の具体的経済事情に関する書籍資料などは、現在では知らず、昭和25年頃の学部書庫には殆どなかった。このことについて先生は早速に神戸大学の藤井 茂先生に連絡を取られ、当該資料の有無を確かめて、貸出しの依頼状と紹介状をしたためて渡された。わたくしはそれを持って藤井先生を訪ね、無事に資料を借り出すことができた。往時の神戸商業大学の教官食堂で昼食後に指しておられた将棋の決着がつくまで、小一時間待たされたことが懐かしく思い出される。

拙稿処女論文については印象深いことがあった。経済学部4階の先生の研究室で、個別に数回の研究報告をおこなった後、経済論叢に掲載するとよいと思うので原稿を仕上げるようにと命じられた。わたくしなりに必死に書き上げて提出した原稿は、数日後に朱に染まって戻された。そして読み直してみれば実に流暢で分かり易く、自分自身の思

考が自分が書く以上に適切正確に表現されているのである。文章表現にはいささか自信のあったわたくしは衝撃を受けると同時に、改めて研究論文の文章表現の重要性を教えられたのである。思えばこのように親切で行き届いた指導は、わたくしにとって感激と同時に驚愕でもあった。このときの原稿は現在も大切に保存している。その後教壇に立つようになって、わたくしは先生の真似を続けるようになった。「機会教育」ということがある。適切な教育指導を間髪を入れずに適切な機会におこなうことであるが、わたくしに限らず、門下生やゼミナール生に対するそのごの先生の時宜を得た、しかも当人の成長を促す人間味溢れる批判やアドバイスは、まさしく「絶妙」の一語に尽きるといっても過言ではなかった。

学者として、研究者として、そしてまた教育者としての先生の面影はこのようなものであった。わたくしはそこに地味で、世間的名声に恬淡で、しかも自らの信条には厳正忠実なお人柄の輝きを見ることができたと思っている。

先生はまた思い掛けない意外な趣味を持たれていた。先代吉右衛門の『地震加藤』や六代目菊五郎の『保名』の見所の話などを伺ったこともあったし、お好きだった囲碁は今亡き真藤素一君（名古屋市立大学教授）が専らのお相手であった。

先生については、学部再建時の苦労話や裏話、そして勲二等旭日重光章叙勲の時の思い出など、まだまだ語るべきことは多いが割愛せざるを得ない。ただ最後に、心寂しくご自宅で病臥静養されていた頃、訪ねる人も数少ない中に、出口勇蔵先生のおりおりのご来訪をなにより懐かしく有難く思っておられ、つねづね温かいご友情に感激されていたことを申し添えて擱筆したい。

ここに改めてご冥福をお祈りしつつ――。

（平成4年8月31日）